

この世界に生きる意味

karinomaki

はじめに

この文章では、カントの純粋理性批判、実践理性批判を中心に、物と精神がこの世界でどのように美しく織られているか、そして、この限られた世界の中で永遠をつくることができるのかを考えてみたいと思います。

この世界に生まれた意味

カントが提唱したのは観念論哲学です。つまり、精神の素晴らしさを書いているのです。それでも、人はこの物質の世界に生まれないといけない。それはどうしてでしょうか。私はこう考えることにしました。この世界でしか手に入らないものがあるからだ。それは物でしょうか。そう考えるとカントの哲学から、はずれてしまいます。でも、精神が大切で、物が大切でないなら、もともと精神だけの世界にいればいいのではないのでしょうか。この世界に生まれた意味がなくなってしまう。それに、物の世界には、苦しみがあります。物は何も助けてくれない。物はただの「物」でしかない・・・という、むなしさです。

私はこう考えることにしたのです。物の中の苦しみに大きな意味があるから、この世界に生まれたのだと。

物の向こうの精神

私は長い間、人生に何が大切なのかさっぱりつかめませんでした。たえず心が焦り、そしてむなしく、いつも何かを探していました。そして、自分が何かを探していることもわかっていませんでした。今思えば、それは人生に何が大切なのか探していたとも言えるのですが……。そして、ある時、かぎをつかんだのです。「物の向こうにある精神」というかぎです。これは、私が受験勉強をしていた頃です。

例えば、何かをする時、必ずと言っていいほど、人は物を使います。しかし、大切なのは物ではなく、物を使って何かをするということなのです。これは、物の向こうの精神を、人が引き出しているからではないのでしょうか。私も、真剣に何かをするまで、気がつかなかったのです。私はまず、自分が勉強しているノートに、何かを感じました。自分が書いていく……。そのことによって、自分は「知識」や、「考える力」という大切な精神をつくっているのです。私はその時、倫理（哲学）を好んで勉強していました。そして、カントという哲学者がとても真っ直ぐなやり方で、この物質の世界から美しい精神を引き出していることを感じたのです。

カントは「物自体」という表現で、物の向こうにある美しい精神の世界を書いていました。

私は、「勉強する」という柱で、物から精神へと、手をのぼすことができたのかもしれない。しかし、精神はどうしても手でふれられないもの。どうすれば、本当に手ごたえのあるものを手にできるのかを、追求してみたいと思います。きっと、カントも、何よりも確かなものが欲しくて哲学したのだと思うのです。

純粋理性批判と実践理性批判

私は、「心で読むカント哲学」で、純粋理性批判と実践理性批判を二本のラインで表すという、とても大ざっぱなことをしました。純粋理性批判がたての線、実践理性批判が横の線です。さらに大ざっぱなとらえ方をすると、純粋理性批判が物質の世界の苦しみ、実践理性批判が精神の世界の道徳です。人は、たてが苦しいので、横を目指してのぼりますが、どうしてもものぼることができないのです。この世界は物質の世界だからです。しかし、たてと横の線は、この世界で、とても美しく織られており、この美しさを探ることこそ、この世に生きる喜びなのです。つまり、物と精神はこの世界で、とても美しく織られているのです。そのことがわかっている人と、わかっていない人では、生きる喜びが全く違うのです。わかっているだけで、この世はとても実りのある、素晴らしい世界となります。

「物自体」という、精神の世界をカントがどうして「物」という字を使って表しているか・・・私は、カントも、物と精神が織られていることに気がついていたからだと思うのです。

とげの中の栗

「ア・プリアリな総合判断」という言葉がカント哲学の中にあります。この言葉は、またも大ざっぱな言い方をしてしまいますが、人があらかじめ持っている、物質界を突き抜けた認識と考えてよいと思います。この認識は、物の世界にしながら、物よりも手ごたえのある精神の宝を手にするものです。

しかし、それは、たてのラインである、物の中の苦しみ、すなわち「執着」の針に刺される経験をしないと、得られないのです。なぜかというと、物という、とげだらけの、いが栗の中にしか栗はないのです。・・・物の中でもがいた人にだけ、物の中に美しい精神がかくされていたことがわかるからです。

本当に物の中に、美しい栗があるといいですね。しかし、そう簡単なことでもありません。大切なことは、物と精神が美しく織られていることを自覚することなのです。それは、この世界の秩序を知ることなのです。この秩序の美しさを書いたのが、カントの純粋理性批判と実践理性批判だと思うのです。

秩序の美しさ

それでは、これからカントの哲学と私の経験を書いて、その「秩序」の美しさを分析してみたいと思います。

カントは、デカルトの「物心二元論」のように、物と精神をはっきり分けているとは言えませんが、物質界である感性界と、精神の世界である可想界の存在を哲学する二元論です。感性界については、主に純粹理性批判で書き、可想界については、実践理性批判で書いています。私はこの二つを、たての線、横の線で表したのですが、それは、先ほど書いたように、たてをのぼって横に乗ろうとする人間の心理だけでなく、秩序の美しさを表したいという理由もあります。織物はたてと横で織られていますよね？座標もy軸とx軸のたてと横の線です。私は、たての線という、物質界の執着にすらのぼろうとしないで、二つの線のはるか下の沼をおぼれていたことがあります。「大切なものが何もない」という状態でした。大学受験をする前、私は勉強が手につかなくなりました。勉強することが大事だとは、漠然とわかっていましたが、どうして大事なかわかりませんでした。今思えば、「何かをする」ということは、「物と精神を織る」ということを感じるかぎなのです。最初に書いたように、人は何かをすることで、物を使って精神をつむいでいくからです。

そして、精神をつむぐとき、必ず、人は「ア・プリオリな総合判断」の光を見ます。例えば、自然界（物質界）の事象の中にひそむ謎が、人の力でわかるということです。神が物質界に込めたメッセージを読み取っていくということ・・・これがア・プリオリな総合判断と言えるのですが、これをするためには、物質界の中の何かに働きかけて、精神をつむいでいこうとしないといけません。何かをしないと始まらないのです。大切なものが何もないとき、私の心は沼の中のようで、常に「苦しみ」、「むなしさ」にさらされていました。しかしそのために、私はもがくように、何かを探し始めたのです。心を守るために。心、精神が大切に、守らねばならない・・・そのためには、何かを見つける必要があるとわかったからでした。そして、私は受験勉強を始めたのです。

精神の宝

何か支えがあれば、苦しみは半減し、喜びは大きくなります。それは、ア・プリオリな総合判断という、精神の宝を持つことだと、今はわかるのです。物質界を突き抜けて得る、精神の宝に勝るものはないからです。受験勉強は、私の精神の宝をつくってくれました。しかし、私は間違えてしまいました。そのあと、この世界で、形あるものに頼って生きようとしたのです。大学受験を終えて、勉強することから解放されたとたん、私は物と精神を織る喜びを忘れてしまいました。せつかく心の沼から抜け出たア・プリオリな総合判断の宝を、私は目に見えるものにすがって、手放してしまいました。

母からもらった指輪

私は19歳の誕生日に、母から指輪をもらいました。浪人したのち、大学に入り、勉強する喜びはいつしか忘れていました。その指輪をはめているうちに、突然、受験の時に会ったカントの哲学を思い出したのです。カントがこの世界から、美しい精神の世界を導いたことを。私は、ずっと、心だけが大切だと思っていました。しかし、そうとも言えない気がしてきたのです。「物の中から精神を導くことは可能だろうか。」そう考えた私は、カントの純粋理性批判を読み始めました。そして、「物自体」という言葉を再び見つけたのです。「物自体」は、物質の先の精神の世界を表す言葉なのです。

ア・プリアリな総合判断

私はその頃、自分のやりたいことを見つけていませんでした。再び心の沼に落ちかけていたのです。私はその、「物自体」という言葉と、「純粹理性批判」は、物を大切にすることで沼から抜け出すかぎだと思ったのです。私は、物の奥底の精神の存在をすっかり忘れてしまいました。私は、物を大切にすることで、むなしさから抜け出すことしか頭になくなってしまったのです。その時、私は純粹理性批判の読みも浅く、実践理性批判を読むこともしませんでした。

物の中だけで生きようとした私は、やはり、物と精神を織ることをしませんでした。カントは純粹理性批判で完全に物だけを論じているわけでは決してないのです。カントは自然界（私が今まで大まかに「物質界」と書いてきました。）を認識すること、そして、自然界に働きかける私達の精神を書いているのです。カントが最も書きたかったのは、物質界のことではありません。物質界を精神で突き抜ける可能性を探っているのです。それは、「ア・プリアリな総合判断は可能か」というカントの問いに表されています。

例えば、この世界で、完全に何かに頼って生きようとするとき、人は物質的なものの中だけで生きており、物と精神を織る喜びを放棄しているのです。私も、指輪を代表とする、物の世界で生きようとしていました。すると、執着の針が追いかけてくるようでした。もし、本当に物に力があれば、そんな針からも、苦しみからも物が守ってくれたでしょうが、やはり、物は物なのです。物の力を引き出すためには、物と精神を織って宝を探る、「ア・プリアリな総合判断」が必要なのです。

私は、だんだん、大切にしすぎた指輪が苦しみを連れてくるような気がしてきました。

私は、この世界のむなしさ・・・「物は物でしかない。大切なものは何もない」というむなしさから逃げようとするために、カントの純粹理性批判を都合よく解釈してしまったのです。

アンチノミー

カントはとてもシビアな目で、人の理性の限界を書いています。物の世界から精神の世界へ突き抜けようとする、アンチノミー（二律背反）という矛盾が起きるといふのです。

その矛盾は4つあります。一つ目は、「世界は時間的、空間的に有限か無限か」、二つ目は「世界における物体は単純なものから成るか、それとも単純なものは存在しないか」、三つ目は「自由は存在するか、あるいは自由はなく、自然法則しか存在しないのか」、四つ目は「神は存在するか、しないのか」といふものですが、カントはこの世界で、この4つに答えを出すことがどうしてもできないと言っています。これが「理性の限界」なのです。しかし、私なりに考えてみると、この限界の壁は必要なのです。物の世界という「檻」を、人は抜け出そうとして、理性の限界という壁にぶつかる。だからこそ、この世界の中から必死で大切なものを織っていこうとするのです。カントの「ア・プリオリな総合判断」も、アンチノミーがなければ、必要のないものです。もし、世界の限界を人が知ることが可能で、物体の仕組みもすべてわかっていて、自由と自然法則の関係もつかんでいて、神の問題まで知りつくしていたら、この世界において、何を努力する必要があるでしょうか。この世界の限られた物の中で、もがくことは、いずれ光を作り出します。それが「ア・プリオリな総合判断」です。「ア・プリオリな総合判断」といふ、物と精神を織って宝をつむぐ努力は、4つのアンチノミーが解決されて、人が精神の世界という広大な場所に飛び去ってしまえば、必要なくなってしまうのです。

永遠の力

人は、生きている限り、アンチノミーをこえることはできず、限られた世界にいます。それでは、この世界から、永遠の力を導くことは可能でしょうか。物の中の執着から逃れた私は、再びカントの哲学を読み始めました。すると、単純に物と精神を分けなくて、二つを美しく織っている美の中に、確かに永遠を感じたのです。心の沼から逃れ、受験勉強をして、またむなしい沼に落ち、物への執着に追いかけられた私は、沼から柱を立てるということに気がつきました。その柱は、何かに打ち込み、物の奥底にある力を引き出すことです。物と精神を織って力を引き出すことです。その力を引き出し続け、柱をのぼり続け、それでもやはり、人生がいやになったり、壁にぶつかり、アンチノミーをこえることはできません。もがき続け、幸せな精神の世界に行きたいと思うことの繰り返しです。どうしてこんな世界で生きていないといけないのかと思ったりもします。しかし、上がったたり下りたりの繰り返しこそ、そして、アンチノミーの矛盾の中で生きることこそ、ア・プリオリな総合判断の宝を磨きます。苦しいからこそ、永遠につながる宝をつくれるのですね。「批判哲学」という、理性批判のカントの哲学に、私は永遠を確かに感じるのです。